「パパラッチ（双葉社）」
2006年9月号～2006年12月号

『おセックスの夜明け』
バックナンバー

2006年12月号

脈々と受け継がれた「性の歴史」
ニッポン「おセックスの夜明け」

KAZUKI

ワシや。カズや。ワシは長年、陰部が痒うなる病気の事をインキン、女性の場合は「インマン」っちゅうんやろと決めつけとったんや。それがこの度、とんでもない勘違いっちゅう事がわかったんや。

実はその日…、ワシは何か面白いネタがないかと死んだ爺の日記を漁ってたんや。そうしたら、

「あの女はカンジタやった。…陰金（インキン）のワシと相性がピッタリやった」

と、書いてあるページをみつけたんや。ワシは腰が抜けて眼から鱗や。「インキン」は「陰金」…。そして女の罹る陰金に似た病気に「カンジタ」っちゅうのがあるのんか…と。しかし男が「陰金」で女はカンジタ（感じた）とはどうも胡散臭いのう。

ワシは日記を貪るように読んだんや。その結果、凄い事実が判明した。それは「オーラルセックス」についての深い歴史や。さあ、今日は皆にその内容を大公開したるで。

しかし、ホンマかウソかは聞かんといてや。これは死んだ爺の日記やからな。

日本におけるオーラルセックスの始まりは今から遡ること約1500年前。歴史の教科書でいえば、第33代推古天皇がご活躍の時代。

ここで、少しワシの博学を披露すると、推古天皇はご存知のとおり29代欽明天皇の皇女で、母は大臣蘇我稲目の女堅塩媛。第31代用明天皇は同母兄、第32代崇峻天皇は異母弟。蘇我馬子は母方の叔父。おまけに「日本書紀」に「姿色端麗、進止軌制」と記された正統派や。推古天皇は第30代敏達天皇の皇后「広姫」の逝去を承け、18歳で皇后になったんや。早い結婚やで。今やったら高校生ちゅうことになるが、当時はこの歳での結婚は当たり前やったんや。

まあ博学なところを晒すんはこの辺にしといて、この時代の女性は推古天皇のように、とにかく結婚が早い。生理が始まったら結婚適齢期ちゅうても過言ではない。

しかしながら、高貴な方々ならともかく、中流家庭の娘の結婚っちゅうたら、妻になるための教育をされているわけでもなく、実際のところは未熟な子供や。おまけにこの時代はスーパー銭湯もエステも無い、風呂未開発の時代や。この時代の既婚娘の多くは若さゆえ汗をかきかきいつも股間をポリポリ掻いておったそうや。それが現代のカンジタの症状とはこの時代、誰も気づくはずが無かったんや。

話はオーラルセックスに戻るで。よー聞きや。

ある日の事、とある上流家庭の新妻が野で傷ついた鹿が足の傷口を舌で舐めているのを観たんや。そしたらその娘、とんでもないことを閃いた。

「私の股には傷がある。おまけにその傷は縦に割れて痒い。そうだったのね。舐めればよいのネ」

時は弥生時代の後期、図書館の文献に載ってた飛鳥時代よりもズッと前の事や…。

ところが、自室で何度も何度も自力の股間舐めを試みるも、自分では舐められるはずもない。首筋が痛くなるだけや。そこで…、考えた末、従者を自室へ呼ぶと、恥ずかしさを押し隠し、

「おまえにちょっとモノを頼みたい。実は…、ココが痒うて仕方がない。おまえ、私のココを舐めてみよ」

命令された従者はビックリしよったで。

「ホンマによろしいんでしょうか?」

と最初は遠慮したものの、あるじの妻の再三の嘆願に、

「ほんなら…ちょっと…」

と、四つん這いになって、一舐めしよったんや。舐められた新妻は、

「オオ! 気持ちがよい。未曾有の衝撃じゃ。しかし、まだまだ足りぬ。もっとしっかり舐めよ」

と、いっそう大きく股を開いたもんやから、従者は、

「ホンナラ…、お言葉に甘えまして…」

と両足を持ち、四つん這いのまま、ベロベロベロベロ…と勢いよく舐め回した。

「気持ちが良いぞ、最高じゃ、絶頂じゃ、感じる感じる…」

幼な妻は未体験の刺激に激しく全身を痙攣させ、絶頂寸前。と、その時だった。夫が部屋に入ってきた。

「な、何をしておる!」

あるじである夫は目の前の光景を目の当たりにすると、激怒し刀を抜いて四つん這いのまま振り向いた従者の首めがけて刃を振り落とした。

「この愚か者めが!!」

バシッという音と共に従者の首は落ち、幼な妻のアソコは従者の血で真っ赤に染まった。それはまさに派手な生理状態や。落ちた若い従者の首は、そんな妻の股間を名残惜しそうに見つめていたんや。

「ヒエー」

と悲鳴を上げ、オロオロと震えだしお尻をついたままオシッコを漏らしてしまう新妻。主人は娘ほども年の違うそんな妻を観て、

「色っぽい…、オオッ、しかしもっと虐めてやりたい」

という感覚が下半身を大きく包み込んだ。そしてさっき従者がやっていたように妻の股間を舐め始めたんや。

しかし、従者と違うんは自分のモノを頬張らせての69（シックスナイン）という体位状態やった事や。主人は、

「何という快感…、このような体位があって良いモノか」

と悦んだ。

爺の記録によるとその行為は半日続き、翌日からは寝室から新妻の大きな喘き声が途切れることが無かった…と書いてある。

日本でオーラルセックスが始まったんはこの瞬間や。

しかし、爺さんはこんな記録を何処で調べたんやろう。

ひとつ確かに言える事は、ワシの爺は、この日記に記されている女性の陰部を毎夜ベロベロしとったって事や。

ところでこの日記の彼女って…。

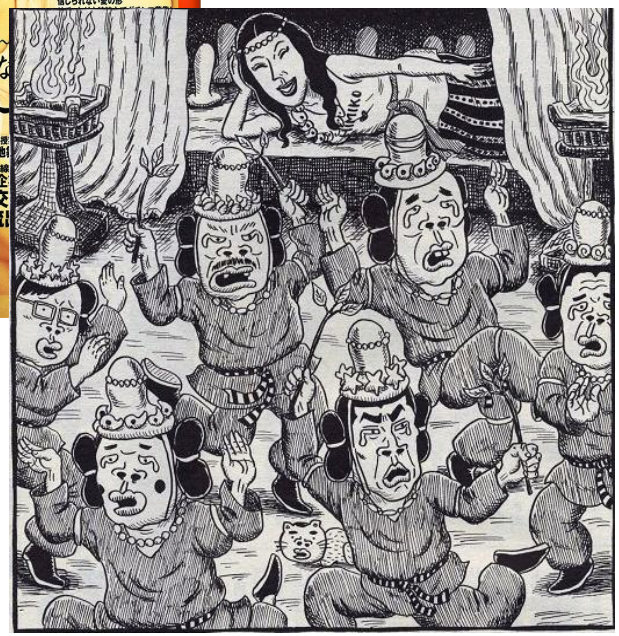
ワシの婆やないか!

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家としてアサヒ芸能にて"KAZUKIコレクション"も紹介する。

文献調査／清上英範

2006年11月号



脈々と受け継がれた「性の歴史」
KAZUKIのニッポン「おセックスの夜明け」
大人のオモチャの巻

ワシや。カズや。最近、ガソリン代が高くなったのう。原油高で農作物やトイレットペーパー等の商品も大幅値上がりや。これじゃ、おちおち買い物なんか出来へんやんけ。こんな時は、部屋で玩具を使ってイチャイチャと遊んどくしかないで…。

そういえば、この前、雑誌で見たんやけれど玩具もハイテクの時代やのう。子供の玩具の話やあらへんで。今や大人のオモチャもギンギンのハイテクなんや。スイング、くねり、IC制御っちゅう機能が付いた優れ物が登場し、本体素材もセルロイドやプラスチックからシリコンやエコロジー系素材エラストーマへと変わっとる。女性も口が肥えてきたっちゅうもんやで…。

さて、ワシは某雑誌愛読者間ではチイとは知れたオモチャ大王や。ワシ自身も博識な変態と思っとる。そこでや…、大人のオモチャを使った性具の歴史も近所の図書館で調べてみたんや。すると、記録に大人のオモチャが始めて登場したのは、7世紀初頭の飛鳥時代やったワ。唐から大和朝廷に贈られた品々の中に、青銅製の張形（ハリガタ）が含まれとったんや。張形っちゅうのは男性自身の形のこっちゃ。それが奈良時代になると、水牛の角で出来た張形が伝わり、それら性具の製造や使用は、もっぱら時の権力者の手に委ねられていたそうや。ワシ等のような一般庶民の目に触れるようになったのは、800年以上も後の江戸時代になってからやそうや。

さあ、性具解禁の江戸時代になると、江戸は両国に四ツ目屋忠兵衛が創業した四ツ目屋という「性具秘薬」の専門店がオープンしたんや。アダルトショップ第一号の誕生っちゅうわけやナ。以来、性具は四ツ目屋道具、秘薬は四ツ目屋薬と呼ばれていたんや。

取り扱い商品も豊富やで～。木材や水牛の角でこしらえた張形に女2人で共同に使用する「互形」。木材や水牛の角でこしらえた「琳の玉」や、干したナマコの輪切りで出来ていて、お湯に付けて軟らかくして男性器にはめて使う「なまこの輪」と、花盛りや。

これら性具は、小間物屋の行商人が、紅や白粉、爪楊枝などの細々とした物と一緒に売り歩いたそうや。現在出回っているアダルトグッズの大部分は、すでに江戸時代に考案されていたっちゅう訳や。あーあ、ワシもこんな行商をやってみたかったのう。

「奥様、キャンペーン期間中ですので、特別に使い方をご指導致しまーす。ちょっとお股を御開帳下さい」ってな具合にな…。

しかし、文献の紹介だけやったら図書館の受付さんでも出来る。今日はあんたらに、文献に載っていない〝ネタ〟を披露したるワ。

ただし、ホンマか嘘かは知らんで。ワシも死んだ爺に聞いた話しやからな。

大人のオモチャの最初は邪馬台国？

邪馬台国に卑弥呼っちゅう女帝がおった事は知っとるよな。卑弥呼は何やら儀式を行なって、下々の関心を引いて国を統治しとったんや。その卑弥呼が昼間っから性欲がおさまらん女やった。で、世話役の男にこう言ったそうや。

「何故か予はおまえの下半身についている突起物が気になるのう。魔が住み着いて居るかもしれぬゆえ、ちょっと予の此処に入れてみよ」

流石に側近は驚いたで。

「私のコレをですか？」

そう言ってシコシコ擦ると、「こんな具合で如何でしょうか？」と挿入するや「ホイホイホイホイ」と腰を降り始めたんや。卑弥呼は、

「良い良いぞ。奥まで突いてみよ。それではまだまだ除霊出来ぬ」

と歓喜しながら催促や。男も卑弥呼と交わる事の喜びと除霊してもらえる幸福感でハッスルハッスルや。時を忘れ前後斜めと奮闘したそうや。

使っても使っても衰えぬ物を作成!?

やがて、男は絶頂に達し、「こんなん出ました」と、男が射精したんや。しかし、卑弥呼は「まだ魔が残って居る。早う追い出せ」と、再度突くように命じたそうや。男は二度目もチャレンジしたんやが、卑弥呼が限りなく要求するするやんか。仕舞には「擦りすぎて小さくなりました」と、言い訳しよったん。やむなく卑弥呼は「このことは神のなされた行為。他言すると終生呪われるぞよ」と、男に口止めや。その後、卑弥呼はひとりで考えたんや。

「愛おしいのはあの男ではなく下半身のモノだけじゃ。まってや2度3度では物足らぬ。擦り過ぎても小さくならんモノはないのかのう」

そして、いつもの古具の動物の骨をいじりだしよった。と、その時や。卑弥呼の脳裏に光が差したんや。

「そうじゃ、好みのモノを動物の骨で創ればよいのじゃ」

卑弥呼は早速側近に命じ、今で言う〝おしゃぶり型〟の大きな男性自身を作らせたんや。そしてその性具の下部に貝殻で装飾したんや。

「おお、愛おしい。可愛いのう。これならすり減らぬし、いつでも存分に浸れる」

卑弥呼は、モノを舐めながら大喜びしたそうや。

その日から卑弥呼は昼夜を問わず、擦り続けたんや。

「ハフーン、ハフーン、脳天がシビレル～」

毎晩のように宮殿から聞こえる獣のような声に、警護を任された従者たちは震え上がったそうや。

卑弥呼がやったことはそれだけではあらへん。ことともあろうに、大人のオモチャを呪術道具として祭り立てたらしいわ。怖いで～。従者たちが、大人のオモチャを持ちながら神に向かって踊り狂っとるんやからな。

ま、これが大人のオモチャの始まりや。ホントかどうかは知らんで。ワシも死んだ爺から聞いた話やからな。

KAZUKIプロフィール
ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家としてアサヒ芸能にて〝KAZUKIコレクション〟も紹介する。

文献調査／溝上英範

2006年10月号

脈々と受け継がれた「性の歴史」
「夜這い」の巻

KAZUKI

文献調査／瀬上英範

ワシや。カズや。暦はもう秋になったけど、みんなは野獣的性欲を満たす一夏の体験は出来たか？　ワシは夜中にエエ女の所に毎夜「夜這い」して、マグナム100連射やと、自慢したかったんやけど、実際はズッとエロ本の視姦をしていたんや。ホンマに寂しい日々やったで……。

ところで、男なら誰もが夢みる「夜這い」やけレ、「夜這い」という字は当て字って知ってたか？　元々は平安時代頃から「婚」で「よばい」と、読んだんやで。そやから「婚人」は「よばいびと」っちゅうて、求婚する人で、「婚文」は「よばいぶみ」で、求婚の意思を込めたラブレターとか手紙のことや。どうや、これで夜這いと聞いて神聖なイメージが持てるようになったやろ。そして、そんな格式の高い夜這いや、それなりのルールも有ったんやで。

先ず、当時の夜這いは「婚文」を相手の女性に送り、精一杯口説いて承諾を得たら行動開始や。女性は受け身やけれど拒否権があって、承諾が無い場合は強姦になりよる。おまけに夜這いの掟を破った人間には村に住めなくなるほどの強烈な仕置きがあったから、掟破りはほとんど無かったらしいワ。つまり、掟の上になりたった奔放なセックスちゅうわけや。それに、当時の日本の家族は、性教育には熱心やったんや。なんせ、子供は将来の労働力やからな。

さて、両親は息子が一人前になったら、親類縁者の中で、コレという女性を選びだしてセックス指南を依頼したんや。そして手取り足取り、女性の体の構造と、扱い方の指導を任せたんや。そんなカウンセラーを依頼する余裕の無い家でも、近所の若者同士が集まって後家ハンの家に行ってそれなりに教えてもろてたらしいで。

一方、娘の場合は、母親や叔母さんや先に一人前になっていった近所の姉様たちが、具体的に心構えや、手練手管を伝授するなど、共同体が一丸となって教育がなされたんや。そして赤飯を炊いて祝った夜に一族の年配者や、しかるべき長老の謹かに、水揚げというか、道を通してもらうのが慣わしやったんや。何で貫通式をするかというとな、そうしとかんと、夜這いされたとき、女が戸惑うことになるからや。

この話はホンマか嘘かは知らんで。ワシも死んだジジイに聞いた話やからな。せやけど、ジジイから聞いた話の続きに「教科書と違う“夜這いが変えた歴史”っちゅのがあるから、今日はその内容を聞かせたるワ。

みんな白河法皇って知ってるか？　「院政」っちゅうて、トップが一時的に表舞台を去ったフリをして裏に回って人を操ったりする政治形態を成立させたお方や。荘園整理令を幾度か出し、院の武力として北面の武士を創設する一方で、深く仏教に帰依し、法勝寺、尊勝寺などを建立、永長元年（1096）、皇女の郁芳門院の死を悼んで出家して法皇となったと、教科書には書いてある。

ところが、この法皇、掟破りの夜這いで親子二代に恨みをかったというんや。

当時、祇園女御と呼ばれベッピンで名高い女性の元へ、白河法皇は夜な夜な使いを出して「婚文」を持たせたんや。ところが、いつまでたっても色良い返事が返って来ない。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』（ジーオー企画）等がある。

1人のオンナの“情念”が大きく歴史を変えた！

掟破りの強姦や。

止める臣下を振りきって鼻息荒く件の女性の元へ。

しかしながら、祇園女御はどうして色良い返事を返さなかったのか？　相手は高齢といえども白河法皇や。不足はないやろ。最近の女子大生やったら「おねだり出来て最高」っちゅうてるハズや。

それをなんでやねん……？

実は使いの者が白河法皇の身分を偽り、差出人を「多胡作」っちゅうダサイ名前で職業は坊主だといって、婚文を渡していたんや。けど、祇園女御も良く考えたら分かるやろ。大体、多胡作ちゅう名前の坊主が居る訳ないやろうが。マア、エエワ。先を急ごう。

掟破りの訪問を受けた祇園女御は驚いたで。多胡作っちゅう50歳を越えた坊主が襲いかかって来たんやから。

法皇も諦めへん。何しろ自分が「多胡作」になっているなんて知るよしもない。掟破りの強姦開始や。祇園女御は、「何故、多胡作とかいう坊主に、何の因果で抱かれなければならぬのか……」

抵抗を試みるも、その仕草を押さえつけさせた……。

その後「多胡作」が白河法皇と知った彼女は仰天。が、流石に「そうでしたか」という訳にはいかん。法皇のことを一生涯恨んだらしいわ。

しかし、そんなセックスほど受精しよる。祇園女御は一発必中で身ごもり、男の子を産んだんやが、実はそれが「平清盛」やという説もある。

さあ、ここで話が終わったら単なる強姦話や。ここからが本番や。清盛は保元の乱、平治の乱で源氏を押さえ、中央政界に進出して太政大臣となり、一族を朝廷の高位高官につけたんや。そして西国に500余りの荘園を持って30カ国を知行国として全盛を誇った。法皇が院政で影のボスなら祇園女御も清盛の影の女ボス。掟破りの夜這いを決して忘れへん祇園女御は清盛をして院政制度を崩壊させ、代わりに、血縁関係のある安徳天皇を即位させ、祇園女御の子、清盛はその影で独裁政治を行なったんや。ここで祇園女御の報復は時を超えて完結する。そやけど、いつの時代も「権利と義務」や「奔放と掟」っちゅうふうに物事はふたつでひとつや。あと、女の情念は時代を変えるっちゅう事はみんなも強烈に肝に刻んときや。

2006年9月号

東陽片岡プロフィール
漫画家。昭和33年、板橋区生まれ。主な作品に「されどワタシの人生」（青林工藝社）、「お三十路の町」（小学館）などがある。漫画サンデーにて「煩悩劇場」連載中。

脈々と受け継がれた「性の歴史」
ニッポン「おセックスの夜明け」

KAZUKI

ワシや。カズちゃんやで。

「妖怪百鬼夜行」〜「つれづれ日記」に続いて、今度は歴史で綴る「性風俗史」や。この意味不明な流れにワシはメチャ戸惑っているんや。この雑誌は、編集長の趣味ですぐ企画内容が変わるんやけど、まあ、ワシもエロスは嫌いやないし、あんた等も好きやろうから、良しとしようや。

さてさて、性風俗といえば、熟練した女性は勿論、現代は20歳前後のヤングギャルまでキャバクラに勤めて「源氏名」を堂々と使っとる時代や。

ところで源氏名って何か知っとるよな？ 水商売や風俗店でコンパニオンが使う本名でない名前のことや。この源氏名の由来はその名のとおり「源氏物語」と関係があるんや。みんな知っとるケ？『源氏物語』には、各巻に〝夕霧〟や〝紅梅〟っちゅう具合に、内容に関係なくロマンティックなタイトルがついてるんやが、この巻名が平安時代末期の女官に名前としてよく付けられていたんや。

そしてこの習慣は白拍子（神前で舞を舞う女性）に伝わり、白拍子が遊女になってからも続いて、ついには水商売の女性や芸人にも伝わったっちゅう訳や。

長い説明やで……ホンマニ。

しかし、源氏物語は偉大やろ。さ、そろそろ本題に入ろうか。

源氏物語といえば、初代プレイボーイの光源氏を想像するけど、光源氏のモデルって誰か知っとるけ？ 実は藤原道長がモデルらしいワ。おまけに道長は源氏物語の原作者といわれている紫式部をお妾さんにしとったらしい。ホンマか嘘かは知らんで。ワシも死んだジジイに聞いた話やからな。

せやけど、この話が結構オモロイさかいに、ちょっと内容を聞かせたるワ。絶対にここだけの話にしといてや。

藤原道長といえば〝この世をば、我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思えば〟と歌い、この世はすべて自分の為だけにあると勘違いをしていたイケ好かん奴や。

こいつは幼い頃から負けず嫌いで、10代の時、夜中に明かりのついていない御殿まで行く肝試しで、2人の兄を負かした事まで記録に残しとる超プライド人間や。

成長し、関白を務めていた2人の兄が続けて亡くなった為に高い地位を得た道長は、自分の娘を次々に天皇に嫁がせて、娘が産んだ子どもを天皇の位につけたんや。そして自分は摂政という天皇を助ける位につき、朝廷の重要な位を藤原氏で独占していった。

つまり、道長は多くの女性を巧みに操ることによって権勢を伸ばしたんや。現代でいうと〝ワシと結婚したらワシの財産みんなやる。だからワシの女になれ〟と言って沢山の愛人を囲っている結婚詐欺師みたいなもんやで。それも妻妾や愛人ばかりか、姉妹や娘と、それを取り巻く宮中の女性達を片っ端から利用しているのには恐れ入るで。

しかし、道長には大きな悩みがあったんや。それは糖尿病や。

今も昔もこの病気は辛いのう。ワシの身内にも毎日水ばっかり飲んでるオジサンが居てはるさかい、ようわかるで。

ところで、何でワシが糖尿病と判断したかというとやな、道長の日記『御堂関白記』を覗てピンときたんや。この日記を読むと、誤字、脱字、字句の書き入れや抹消が甚だしい状態や。これは彼の豪放な性格だと歴史家は見てるようやけど、ワシに言わせたら道長は、ワシのような落ち着きのないアホやないから、病気による注意力の散漫が原因やと思っとる。

そうなると、夜の生活はどうなるやろか……。

あの藤原道長がSM愛好者だという仮説が…!?

カネによって世の中の地位や名誉と欲望が手に入ると考えている道長が、純愛女流作家の紫式部をどうやって手に入れたかは想像出来るやろ。

いよいよ道長は権力にモノをいわせて紫式部と交際していくんやが、こいつがしたことは今でいうセックス・プレイじゃなくてレイプ。つまり強姦や。プレイとレイプでは大違いや。ところが道長は性器の大敵の糖尿病を同居させとる。そうなると、勝ち気な性格と、思い通りにならんポコチンが走った先はSM。ワシの最も得意とする、大好きなジャンルや。

夜な夜な繰り広げられる変態セックス。風流とはかけ離れたその世界にだんだん式部の心が離れていくのは手に取るようにわかった。そこで、道長は叫んだんや。

「本当に私はおまえを愛している。表面には萎えたモノしか見えなくても、君に愛を注ぎたくて私の心は張り裂けそうじゃ」

それは、式部の空想力を最大限、刺激したんや。式部は涙ながらに訴える道長の姿と自分の置かれた立場。そして空想の男性をトリプルクロスさせてしまったんや。

女っちゅう生き物は、逃避癖と強い自己防衛本能を持っているからな。そして極度に相手の内面の一部を美化すると、古典的少女漫画になりよる。ましてや紫式部は空想家やで。

その逃避の結果、『源氏物語』が誕生したんや。

そうなると、女流作家の紫式部はパワーが出てきよる。

「可哀想なお方。愛情を上手く伝えられないのね」

と、勝手に母性愛を発揮させた。自分の思いこみで子宮もグルグル疼くんや。で、式部は道長のために現実とはちがう道長像を『源氏物語』に託したっちゅうわけや。

「あなたの求めているのは愛撫で御座いましょう？ お立場は天の世界をお持ちなのに、大事なモノを地の国に忘れた可哀想なお方……」

と、紫式部が囁くたびに道長はウンウン唸っていたんや。

ちなみに、清少納言はSで、紫式部はMやったらしいで。

何でかって？ それぞれの名前の頭文字みてみいな。

KAZUKIプロフィール
ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』（ジーオー企画）等がある。